

異常を指摘され当科受診。腹部単純レ線にて右腎中下極・左腎中極に石灰化陰影あり、立位にて鏡面像形成。IVPにて右腎の圧排強く、昭和61年7月22日右腎杯憩室壁切除、結石摘出。結石成分は、磷酸カルシウム92%、蔞酸カルシウム5%、磷酸マグネシウムアンモニウム3%。切除標本に移行上皮を認めた。左腎は経過観察のみ。

15. 小児急性リンパ性白血病患者の化学療法後の睾丸機能の検討

石井弘之 (千大)

小児急性リンパ性白血病(以下 ALL)は、化学療法の進歩により半数以上に完全治癒が期待できるようになった。今回、睾丸組織に対する化学療法の影響について検討した。対象は千葉大小児科において治療した ALL の患者16人の計21の睾丸組織であり、Johnsen's score count, mean tubular diameter, tubular fertility indexにて評価した。JSC, MTD は半数例で低下していたが、TFI 低下は一例であった。

16. 停留睾丸における固定術後の睾丸機能の検討

長 雄一 (千大)

現在18歳以上に達している停留睾丸患者76人を3群に分け検討した。12歳までに固定術を受けた24例(A群)13歳~19歳(B群)20歳~(C群)。血中LH, FSH値はA群に比べBC群が高値。両側性は高値であった。片側例精子濃度はA群が他より高値であった。両側例7例中6例は無精子症であった。B, C群のジョンセンズスコアは4.89で両群に有意差は無かった。片側例27例中8例に子供をみた。

17. 腎腫瘍の肺転移巣に対するUFT著効の1例

宮城武篤 (千大)

肉眼的血尿と左側腹部痛を主訴に来院した61歳の男性で、両側肺野に広範な転移巣を有した進行胃癌に対し、腎臓術後UFT 600mgを連日経口投与した処、投与6週目には転移巣の50%以上の縮小を認め(PR)、投与14週目には肺転移巣は完全に消失した(CR)。この時点で α_2 -Globulin, 血沈, CRPは全て正常化した。現在まで5年7カ月間腫瘍再発を認めていない。

18. Kock urinary reservoir の1経験例

佐藤信夫, 李 瑞仁, 高岸秀俊
(船橋中央)

58歳, 男性の膀胱腫瘍患者に、根治的膀胱全摘後、

Kock urinary reservoir を作成し良好な経過を得ているので報告した。

手術方法はSkinnerらの方法に準じて行った。Pouch作成には7時間を要した。術後経過は良好で、現在平均300mlの自己導尿を行っている。今後、更に症例を加えて行きたい。

19. TUR-P 後の尿道狭窄

桜山由利 (国立千葉)

TUR-P 後の尿道狭窄について、国立千葉病院泌尿器科で1983年4月から1986年12月までに施行された76症例について検討した。術後尿管狭窄の出現頻度は、76例中7例、9.1%であった。術前術後の尿路感染の有無、バルンカテーテル留置期間、手術時間について検討したが、特に因果関係は認められなかった。

20. 偶然発見された無症候性腎細胞癌の3例

甘粕 誠, 中津裕臣
(鹿島労災)

消化器症状を主訴に超音波検査を受け、偶然発見された無症候性腎細胞癌の3例を報告した。症例はいずれも男性で、病理組織は淡時細胞癌 pT₁ N₀M₀ 1例, pT₂ b N₀M₀ 2例であった。超音波検査はスクリーニングとして有用であると思われた。一方腹部CT検査は診断精度の点でより勝っていると思われた。

21. 前立腺のMRI診断

藤原恭一郎 (君津中央大佐和分院)

前立腺癌18例, 前立腺肥大症7例を対象として、0.5 tesla 超電導MRIを用いて撮影した。パルス系列はスピネコー法を用い、T₁強調像にて横断、矢状断、冠状断像を、T₂強調像にて横断像を得た。前立腺癌と前立腺肥大症との鑑別診断、前立腺癌の浸潤度診断、前立腺の体積計測、前立腺癌の治療効果判定に有用であった。T₁, T₂ 時間は前立腺癌に比し前立腺肥大症にて両者とも延長傾向があったが有意差はなかった。

22. 腎腰部疼痛に対する肋間神経ブロックの経験

村山直人, 安田弥子, 大塚 薫
遠藤博志 (松戸市立)

症例は50歳男性で直腸癌の骨盤内再発、骨、リンパ節転移にて放射線療法をうけていた。昭和62年1月に浮腫出現しDIPにて右水腎、左無機能腎の為右腎に経皮腎瘻を造設した。(14 Fr.) 直後より腎腰部の疼痛つよく種々の対策を講じるも軽快せず、第8肋骨に沿う表在性